

れた。初めて飛行機に乗った。そして着いたローマ大学でも、今ふり返ると、突進の連続だった。

あれからもうかなりの年月が過ぎた。初めにも書いたように、今、イタリア語が一番親しむ外国語になり、同時に、一番苦勞する外国語にもなっている。外国語というものはどうにもならないものだ、今もしばしば感じる。イタリア語というジャングルに迷い込んでいるようにすら感じる。ただ、自分のやっていることなどは苦勞のうちに入らないという思いは、今も心にある。また、あの学び始めの頃の仙台の人たちの無償のご好意とご協力には、今も本当に頭が下がる。杉田玄白の『蘭学事始』にも、今度久しぶりに読み返しても、ただただ頭が下がる。外国語を学ぶことで自分の世界が広がる楽しさは学ぶ苦勞にまさるものでもあることを、これらの人々とこの書のお陰で知ることができた。(2001. 10. 21)

## 私はなぜ韓国語にとりつかれたか

経営学部

田川 光照

韓国語の勉強をはじめてまもなく2年が経つ。実力は、自己診断でハングル能力検定試験の4級程度、いばれるものではない。勉強のきっかけは、ある共同研究の調査旅行で韓国へ行く機会があったことだが、その調査旅行が終わってからも、勉強を続けている。その理由は、なんとと言っても面白いからである。

まず、第一に私にとって非常に新鮮であるということがある。中学、高校と英語を勉強し、三十数年前に大学に入ってからフランス語を専門と

した。以後、必要に応じてドイツ語やスペイン語やイタリア語をかじったが、いずれもヨーロッパの言語で、アジアの言語の勉強はこれがほぼはじめてである——「ほぼ」というのは一度中国語をかじりかけたことがあるが、発音の難しさに1ヶ月ほどでギブアップしたからである。はじめてまともに勉強したアジアの言語である韓国語は、文法が日本語とそっくりである。語彙の面でも両言語とも漢語が多く入っており、共通する単語が多い。このために、発音面では日本語に比べて複雑で難しいとはいえ、韓国語は日本人にとって非常に勉強しやすい言語である。

ヨーロッパ言語を勉強する際には日本語の発想から離れる必要があるが、韓国語の勉強の場合はその必要がない。とはいえ、異なる言語であるから、日本語の発想から微妙にずれなければならない場合もしばしばある。たとえば、敬語は、韓国語の場合絶対敬語（身内の者についても敬語を用いる）であり、日本語の相対敬語の発想とは異なっている。こういったことは、日本語の成り立ちについてあらためて反省させてくれることになり、いわば、日本語のもっている普遍性と特殊性といったものをきめ細かく照らし出してくれることになるのである。

個々の表現においても、いろいろ考えさせられることがある。一例を挙げると、極度の事柄を表現するのに「死ぬ」という言葉が日本語でも韓国語でも同じように用いられる。たとえば、「寒くて死にそうだ」は韓国語でもまったく同じで

、「(「チュウォ・チュッケツソヨ」)と言う。ところが、大変おいしいということを表す韓国語の比喩表現

、「(「トゥーリ・モッタガ・ハナガ・チュゴド・モルゲツソヨ」)に出会ったとき、私は腰が抜けるくらいびっくりしてしまった。直訳すると「二人で食べていて、一人が死んでも分からないだろう」となるが、どうみても、このような表現は日本語の発想からは出てこない。「これを食べることができたら死んでもよい」とか、「死ぬほどおいしい」とか言うことはできるが、日本語話者として

は上の韓国語の表現にはどうしても違和感を覚える。それは、主観的な判断にかかわることが、対人関係の中で写實的に表現され、「死ぬ」という言葉とあいまって極めて生々しい表現になっているからであろう。常石希望先生の話しによると、さすがに韓国の人たちもこの表現を用いるときには冗談めかして言うとのことである。それはともかく、上のような表現にかりにフランス語の中で出会ったとしても、別にびっくりすることもなく、単に言語の違いというひと言で通り過ぎてしまうかもしれない。衝撃的であるのは、互いに似た言語、基本的には日本語の発想から離れる必要のない言語の中での発想の違いだからである。

私が韓国語の勉強を面白いと思った第二の点は、韓国語での音の変化である。上で少し触れたように韓国語の発音は日本語よりもはるかに複雑であるが、その一方で、系統のまったく異なるフランス語の音声面と相通じるものがある。子音については相異なる点が多いが、口腔母音をみれば、韓国語の8個の母音のうちフランス語にない母音は平唇の「ウ」（唇を横に引いて「ウ」）一つであり、半母音をみれば、韓国語の2個の半母音はフランス語の3個の半母音に含まれる。ただし、これだけのことであれば、イタリア語やスペイン語の母音は「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の5個であるから、これらの言語と日本語の類似のほうが韓国語とフランス語の類似よりも大きいことになる。韓国語とフランス語に相通じるものがあるというのは、単に個々の母音に類似点があるということだけではなく、音と音との間に起こる現象にも相通じる面があるからである。

フランス語には、アンシェヌマンやリエゾンという現象がある。アンシェヌマンというのは、発音される最後の子音が次の単語の冒頭の母音に連続して発音される（音節が移動する）現象であり、たとえば、「彼は」を意味する主語代名詞il（「イル」）のあとに「～である」を意味する動詞est（「エ」）を置いてil estとすると、発音は「イル・エ」ではなく「イレ」となる。これに対してリエゾンというのは、語末の本来発音されない子音字が、

次にくる単語の冒頭の母音にひっかけられて発音される現象であり、たとえばil estのあとに「名古屋に」を意味するà Nagoyaを置き、「彼は名古屋にいる」という文を完成させてIl est à Nagoya.とすると、発音は「イレ・ア・ナゴヤ」ではなく「イレ・タ・ナゴヤ」となる。

これらによく似た現象が韓国語にもみられる。たとえば、「時間」を意味する（「シガン」）に「～が」を意味する助詞（「イ」）をつけてとすると、発音は「シガン・イ」ではなく「シガニ」となる。これは、フランス語文法で言うアンシェヌマンと同じ現象である。そして、「ない」を意味する（「オプタ」）の語幹（「オプ」）に「～なので」を意味する語尾（「ソソ」）をつけてとすると、の音が発音されて「オプソソ」となるが、これはフランス語文法で言うリエゾンに相当するとみることができる。また単語と単語の間での音の変化も面白い。たとえば、「食べた」を意味する（「モゴッタ」）の前に「～できない」を意味する（「モツ」）を置いてとすると、発音は「モツ・モゴッタ」ではなく「モン・モゴッタ」となる（鼻音化現象で、これはフランス語にはない）。結局「時間がなくて食べることができなかった」という文を完成させてとすると、全体の発音は「シガニ・オプソソ・モン・モゴッタ」となる。

上に述べたのはごく簡単な例にすぎず、このほかにも、韓国語を勉強していてフランス語での綴り字と発音の関係を連想させられるようなことがよくある。ただし、韓国語にみられる音の現象はフランス語におけるよりもはるかに複雑で多様であり、フランス語よりも難しいと私は思っている。しかし、それは本来発音しやすいがゆえにそうになっているはずなのである。実際、韓国語を勉強していると、この音の変化が快感となり、やみつきになる。

最後にひと言。経済のグローバル化に伴い、英語（米語）学習の必要性は今後もますます大きくなるであろうが、それは他の言語の価値を低めるものではない。言語は文化と一心同体であり、人

間の基本的な営為である言語活動は文化的営為である。互いの言語の尊重は、互いの文化の尊重でもある。韓国で、つたない韓国語を少しでも話すと、韓国の人々はすぐ  
 (「ウリ・マルル・チャーラシネヨ」=「私たちの言葉がお上手ですね」)と言ってくれる。異なる文化間での人と人との交流そして相互理解は、このようなところからはじまるのではないだろうか。ちなみに、21世紀は多言語・多文化の時代と言われている。



成せば成る！ 数学の河田賢二先生と市場のおばさん：河田先生は、訪韓前の1ヶ月間に韓国語入門書付属のCDを100回以上聞いて勉強し、現地では韓国語でコミュニケーション。

## 私の外国語学習について

現代中国学部  
服部 健治

私は一応中国語と英語がしゃべれる。“一応”といったのは、何とか相手と意思が通じ合え、こちらの意図すること、つまり仕事や研究事業の目的を、これまた何とか達成できるということであ

り、人に披露できるほどの実力はない。もっと恥ずかしいことは、大学時代に中国語、英語以外にドイツ語1年、フランス語と朝鮮語は2年、ロシア語はプーシキンの詩を聞くまで3年もやったが元の木阿弥である。どれも何一つ実を結んでいない。

ただ、英語学習でプラスであったのは、米国の大学院留学のとき、毎週英語でペーパーを書かされたこと、2年間アメリカの白人家庭にホームステイしたことである。ラリー、ドニー、シェリーの兄、弟、妹は今どうしているのだろうか。中国語のマスターでは、大学で中国語を専攻したが、やはり前職の財団法人日中経済協会の仕事で通算10年間、北京に駐在したことが幸運であった。

とはいっても、私の中国語は英語と同じで実践の中で覚えたので中途半端、本来ならここで紹介するのもおこがましいと思っている。多くの中国の友人は私の中国語を聞いて、おせじと気を悪くしてはいけないと思い、「講得好(上手ですね)」と言ってくれる。私の本心は上手とはいっこうに思っていないので、いつも聞き流している。それとは別に、きまってこのように答えている。「我的中文、基本上没有问题、但是实际上有问题」(私の中国語は基本的に問題ないが、実際上は問題あり)と。要するに、外国語はできるか、できないかしかないのであり、ちょっとできるなどはできない部類に入る。そう考えると、私の中国語も「できない」部類に入るのである。外国語マスターは趣味やアクセサリーでないので甘く見てはいけない。畢竟到達点はない。

その実、私の女房に「私の外国語マスターについて書いて欲しいと頼まれている」といったら、あなたの外国語マスターはいいかげんだから読んだ人が誤った考えをもつので、絶対書かないほうがいいと嘲笑し、苦言を呈する。

ちなみに私の妻は華僑である。今は日本国籍を取り、2児の母であるが、生まれはシンガポール、育ちはジャカルタ、北京で高校時代を過ごし、中国全土に極左路線が吹きまわった文化大革命の終わりごろに広東省の農村に下放した。その後、香